

学生さんもおすすめ！  
＼新任の先生のご研究をのぞいてみませんか／

# 人間科学セミナー

申込み  
不要



7.10 (木)

13:30-15:00

人間科学研究科 北館2F ラーニングコモンズ



公認心理師プログラム運営室

高田 紗英子 先生

13:30 -



社会学・人間学系  
社会環境学講座

松村 一志 先生

14:00 -



社会学・人間学系  
社会環境学講座

丸山 真央 先生

14:30 -



大阪大学大学院人間科学研究科

附属 未来共創センター



[mirai-kyoso@hus.osaka-u.ac.jp](mailto:mirai-kyoso@hus.osaka-u.ac.jp)

高田 紗英子 先生 / 公認心理師プログラム運営室

## 「困った行動」の向こうにあるもの — トラウマを見立て、つなぐ支援としてのトラウマインフォームドケア

子どもたちの「問題」とされる行動や多様な症状の背景には、しばしば語られなかったトラウマ体験や、関係性の傷つきが潜んでいます。こうした背景を見立て、ケアしていく視点として注目されているのが、トラウマインフォームドケア（TIC）です。TICでは、子どもが安心・安全を感じられる関係性の構築が土台となります。

今回のお話では、児童福祉の現場におけるTIC実践の必要性と、それを支える「トラウマ・コンピテンシー」について、全国調査による量的データと、支援職の語りに基づく質的知見をもとにご紹介します。また、当事者である子ども自身への支援として、信頼の回復を土台としたトラウマインフォームドなアセスメントのあり方についても、臨床実践を通して考察します。支援する側・される側の双方が「脅威にならない関係性」の中で力を取り戻すために、何が必要なのかを考えていきたいと思います。

松村 一志 先生 / 社会学・人間学系 社会環境学講座

## 科学にとって「証拠」とは何か — 社会学と科学史の交差点から

近年、「エビデンス」という言葉が一種の流行語になっています。では、「根拠」や「証拠」といった言葉があるにもかかわらず、「エビデンス」というカタカナ語が使われているのはなぜなのでしょう。報告者は、「エビデンス」概念の出現を、より広い「科学的証拠」の歴史に位置づけることで、この問題にアプローチしてきました。こうした研究の背景には、1980年代以降の科学技術社会論（STS）で発達した社会学と科学史を横断する研究群があります。それらは、「事実」や「客観性」といった認識論的概念と、それに関わる科学的実践の歴史を分析してきました。つまり、科学的知識の内容だけでなく、真偽を判定する手続きそれ自体の変化にまで関心が向けられるようになったのです。

本報告では、報告者自身の研究に加え、こうした観点も紹介しながら、科学的知識をめぐる混乱が見られる今日の状況をよりよく見通すための手がかりを提供したいと思います。

丸山 真央 先生 / 社会学・人間学系 社会環境学講座

## メガイベントと都市の社会学 — 2025年大阪・関西万博を中心に

オリンピックや万国（国際）博覧会などの国際的な大規模イベントは「メガイベント」と呼ばれ、近年、ツーリズム、文化、経営など様々な分野により学際的に研究が進められています。そもそもなぜメガイベントは開催されるのでしょうか。誰が開催したがつているのでしょうか。後にどのようなレガシーが残るのでしょうか。こうした問いに、メガイベント研究の中でも特に（都市）社会学が関心をもって取り組んでいます。

この報告では、目下開催中の大阪・関西万博を例に、報告者の調査を中心に紹介しながら、メガイベントと都市との関係を考えます。メガイベントは今、転機にあるといわれており、欧米では立候補する都市や国が減ったり、住民投票で招致を取りやめたりするケースが相次いでいます。それに対して東アジアは中近東と並んでメガイベントのホットスポットになっています。今後、私たちはメガイベントにどう向きあえばよいのでしょうか。そんなことを考える機会になればとも思います。



大阪大学大学院人間科学研究科

附属 未来共創センター



mirai-kyoso@hus.osaka-u.ac.jp